

階層	物理層				プラットフォーム層	
機能	伝送	蓄積	制御	変換・認識	表現	品質
基本機能	<ul style="list-style-type: none"> より大量・多様 より高速 いつでもどこでも通信 人だけでなく物と情報伝達 より誤りなく正確 災害等があっても通信が確保 より安価 より省エネ 	<ul style="list-style-type: none"> より大量・多様 より高速 より誤りなく正確 災害等があっても通信が確保 より安価 より省エネ 	<ul style="list-style-type: none"> 利用者の要求に合わせた大量・多様な情報の効率的な通信 災害等があっても通信が確保 より安価 より省エネ 	<ul style="list-style-type: none"> 大量・多様な情報を利用者が要求する形式へ処理・変換 収集した情報をもとに価値を創造（未来予測を含む） 仮想世界を利用して、実世界の人間活動を支援 より高速 より高精度 より安価 より省エネ より高精度 	<ul style="list-style-type: none"> 大量・多様な情報を変換・認識した出力を利用者が分かり易い形で可視化 初めて使う人や障害者・高齢者の方々にもわかりやすい操作・利用 より高精度 よりリアル より安価 より省エネ より高精度 	<ul style="list-style-type: none"> より安全に（外部からの脅威に対して強い） 利用者の要求に合わせた信頼性 より安価 より省エネ
課題	<ul style="list-style-type: none"> 災害や障害に対する強靭性（レジリエンス） 適切な品質と価格を両立する汎用性（標準化） 多様なサービスに対応できる高可用性 大容量化や高速化に対応できる拡張性 低消費電力化 	<ul style="list-style-type: none"> 災害や障害に対する強靭性（レジリエンス） 適切な品質と価格を両立する汎用性（標準化） 大量データの収集/格納/検索/共有 大容量化や高速化に対応できる拡張性 多様なサービスに対応できる高可用性 低消費電力化 	<ul style="list-style-type: none"> 災害や障害に対する強靭性（レジリエンス） 適切な品質と価格を両立する汎用性（標準化） 低消費電力化 トラフィック量の変化に即応できる柔軟性 ユーザーニーズに応じた QoS ワイヤレスと固定ネットワークのシームレス化 	<ul style="list-style-type: none"> 増大するデジタル情報への対応、活用 リアルタイム分析、大規模分散データベース、統計学、HCI、可視化等の幅広い分野融合 所望する情報の発見時間、及びアクセス時間短縮化 利用者側のニーズの把握・分析 クラウド間（サービス間）のデータ相互利用 リアルタイムのデータ分析とサービス提供 超高速計算システム（スパコン）との連携 	<ul style="list-style-type: none"> リアルタイム分析、大規模分散データベース、統計学、HCI、可視化等の幅広い分野融合 ユーザーインターフェースの高機能化・多様化・リッチ化 利用者側のニーズの把握・分析 所望する情報の発見時間、及びアクセス時間短縮化 アプリケーションの多様化 	<ul style="list-style-type: none"> 能動的で信頼性の高いシステム 先読み防御 個人情報等の柔軟管理（匿名性の保障） 耐災害性強化
技術領域	<ul style="list-style-type: none"> フォトニックネットワーク(伝 1) ワイヤレスネットワーク(伝 2) ボディエリアネットワーク(伝 3) 高精細衛星放送(伝 4) 高圧縮・低遅延映像符号化技術(伝 5) 災害に強いネットワーク(伝 6) 	<ul style="list-style-type: none"> クラウドの基盤技術(蓄 1) 大容量記録技術(蓄 2) サーバストレージ/仮想化技術(蓄 3) 	<ul style="list-style-type: none"> 災害に強いネットワーク(制 1) 放送・通信連携のオープンプラットフォーム技術(制 2) 超高精細映像(制 3) M2M、センサー技術(制 4) テストベッド技術(制 5) 有線統合技術※1(制 6) ネットワーク仮想化技術※1(制 7) グリーンコンテンツ流通(消費電力を含めた全コストの最適化)※1(制 8) 	<ul style="list-style-type: none"> 超高精細映像圧縮技術(変 1) 知識処理ソフトウェア基盤(変 3) スマートグリッド(変 5) M2M、センサー技術(変 6) 電磁波センシング・可視化(変 7) ウェアラブルコンピューティング(変 8) ヒューマンインターフェース(変 9) 脳情報通信・処理(変 10) 超大規模情報流通基盤※1(変 11) データ指向ネットワーク技術※1(コンテンツ・ネットワーク利用情報分析、アクセス方式、情報取得、共有技術)(変 30) 複数クラウド融合大量データ処理基盤(変 2) 大規模シミュレーション・モデリング技術(変 4) 大容量データ検索技術・情報通信フォーマット・ストリームデータ処理※2(変 31) 脳情報通信・処理(変 20) 非構造化データ活用(検索・分析)(変 21) 超高周波の利用技術(変 22) 五感インターフェース(変 23) セマンティクス(意味)理解(変 24) 	<ul style="list-style-type: none"> スマートグリッド(表 1) ネットワークロボット(表 2) ユニバーサルコミュニケーション技術(表 3) 超高精細映像/スマートTV(表 4) ウェアラブルコンピューティング(表 5) 	<ul style="list-style-type: none"> 情報セキュリティ技術(品 1) 社会インフラセキュリティ・制御システムセキュリティ(品 2) 情報基盤強化技術(品 3) ソフトウェアエンジニアリング(信頼性と生産性向上)(品 4) 組み込みソフト(信頼性)(品 5) データ指向ネットワーク技術※1コンテンツアクセス制御(一意性保証)(品 30) 大容量データの相互運用性・信頼性技術・秘匿化技術等の安全性技術※2(品 31) 量子通信(品 20)
当面(2020年頃)	<p>新世代ネットワーク関連技術</p>					
中長期	<ul style="list-style-type: none"> データ指向ネットワーク技術※1(コンテンツ転送・配布)(伝 30) 大容量データ伝送制御技術※2(伝 31) 超高周波の利用技術(伝 20) アンビエントネットワーク(伝 21) 	<ul style="list-style-type: none"> データ指向ネットワーク技術※1(コンテンツ複製消去管理)(蓄 30) 大容量データ管理・蓄積技術・大容量分散蓄積処理※2(蓄 31) 	<ul style="list-style-type: none"> データ指向ネットワーク技術※1(コンテンツ識別子ベースのルーティング)(制 30) 大容量データ伝送制御技術※2(制 31) 	<ul style="list-style-type: none"> データ指向ネットワーク技術※1(コンテンツ・ネットワーク利用情報分析、アクセス方式、情報取得、共有技術)(変 30) 大容量データ検索技術・情報通信フォーマット・ストリームデータ処理※2(変 31) 	<ul style="list-style-type: none"> 大容量情報分析結果可視化・マルチデバイス連携技術※2(表 31) パネル不要のディスプレイ(表 20) 	<ul style="list-style-type: none"> データ指向ネットワーク技術※1コンテンツアクセス制御(一意性保証)(品 30) 大容量データの相互運用性・信頼性技術・秘匿化技術等の安全性技術※2(品 31) 量子通信(品 20)
今後の技術進展(2020年頃)主な事例	<ul style="list-style-type: none"> オール光化により10Tbps級の大容量通信と、現行技術に比べて169億kWh程度の消費電力削減を可能とする技術を実現。現在の1/10以下の消費電力で動作する光変調デバイスの実現(伝 1) サーバボード等の光化により消費電力約3割削減(伝 1) 携帯電話について、現状のLTEによる下り最大75MbpsからIMT-Advanced等による最大1Gbps超への高速化(伝 2) 宇宙光通信はデータ伝送速度現行の約10倍(伝 2) 人体の内部に投入した装置とのデータ伝送等を実現(伝 3) 映像符号化(H.264)の約2倍の圧縮性能の標準化(伝 5) 災害に強いネットワーク技術により、生き残った通信路の相互連携、緊急時の衛星回線の柔軟な利用等を実現(伝 6) 					
	<p>(新世代ネットワーク)</p> <ul style="list-style-type: none"> 有線・無線双方の資源を動的に割り当てたネットワークを即時構築する有線統合ネットワーク技術、標準化の実現(有線統合技術) ノードあたり10000以上の仮想化ネットワークを同時に構築し、サービスごとに異なる仮想ネットワーク技術、標準化の実現(ネットワーク仮想化技術) 複数事業者の仮想化サービス環境におけるコンテンツ配信における全体コストを最適化する手順の確立(グリーンコンテンツ流通技術) 兆単位のデバイスやモノから常時発信されるデータをネットワークを介して活用するサービスの実現(超大規模情報流通基盤技術) 情報を位置によるアドレスで取得・伝送するのではなく、情報そのものをアドレスとして即時にネットワークから取得可能(データ指向ネットワーク技術) 					
	<p>(ビッグデータ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 大量・多様なデータをリアルタイムに収集・伝送・解析等を行う技術や、管理・蓄積技術、総合運用性・信頼性・安全性の確保技術、解析可視化・検索技術、データ秘匿化技術により、将来の予測や今までにない価値、知見の創出等を行い利用者のニーズに応じたサービスの提供、業務運営の効率化、社会システムの安全、新産業の創出等が可能 					

多様なアプリケーション(社会システム)

(1) ※1:「新世代ネットワーク」の主要な構成技術
 (2) ※2:「ビッグデータ」の主要な構成技術
 (3) 複数の「機能」に関係する技術項目については、可能な限り技術開発のコアとなる「機能」の欄に記載するように整理。(コア技術が複数の「機能」に跨るものは、複数の「機能」に記載)
 (4) 専ら半導体、MEMS等のデバイスに関する技術は、原則としてナノテクノロジー・材料共通基盤技術検討WGでの検討対象とする。

5. ICT 共通基盤技術の重点化

(重点化整理のフレームワーク)

- ここでは、ICT 全体俯瞰図の「技術領域」毎の重点化を整理するため、5 つの「技術側の視点からの評価軸」と、2 つの「ニーズ側の貢献の視点からの評価軸」の、計 7 つの評価軸のごとに整理し、基本機能の技術領域と 7 つの評価軸とのマトリックスで整理する。
- 「技術側の視点からの評価軸」については、現状技術の限界を超えるブレークスルーがあるか、信頼性、省エネ性、先端性等のインパクトを示す「革新性」、複数分野のサービスやシステムのコア技術であることを示す「基盤性」、2020 年頃までに実用化されるかを示す「実現性」、国際ベンチマークを参考にして現在強みを有するか、あるいは今後強くなることが期待できるかを示す「国際競争力強化方策の妥当性」、国策として研究開発を実施する必要性を示す「官民の役割分担、連携性の妥当性」、から構成される。
- 一方、「ニーズ側の貢献の視点からの評価軸」については、第 4 期計画の第 II 章（復興・再生、グリーンイノベーション、ライフイノベーション）、及び第 III 章（我が国が直面する重要課題）の「社会的課題解決への貢献度」と、「イノベーション実現に向けた課題の明確化」からなる。「イノベーション実現に向けた課題の明確化」については、対象技術の実用化を図る場合の実施主体の候補が明確になっているか、開発支援及び対象技術を普及させる上での課題（技術的課題から規制等まで幅広く想定される課題も含む）が明確化の観点を含む。

(今回の ICT 共通基盤技術の重点化整理の位置づけ)

- ICT・WG においては、7 つの評価軸の記載内容を基に、特定のどの技術が重点化対象となるか決めるのではなく、その判断に必要となるポートフォリオ的な整理をするものである。なお、今後、特定のどの技術を重点化するかについては、ICT・WG の検討状況及び検討結果を課題対応の各戦略協議会等へ報告・提案し、最終的には、必要に応じて、双方で検討した上で各戦略協議会等が解決すべき課題とともに特定すべきものであると考える。

(ICT 共通基盤技術の重点化)

- 社会的課題解決の貢献度の分類（俯瞰図） : 「課題解決の貢献に関する分類（俯瞰図）」 図 5-1
- ICT 共通基盤技術の重点化整理（整理表） : 「ICT 共通基盤技術の重点化整理表」 別添 2